

『風にちぎれし紅』

登場人物

三浦恒一……革命派の一員。

関谷 誠……革命派のリーダー。

岡野玲子……革命派の一員。

倉田修司……革命派の一員。

片瀬直子……三浦の恋人。

その他（ラジオの声、警官隊の影、拡声器の声）

第一場 残響

廃劇場。舞台奥には破れた緞帳が半分だけ垂れ、舞台袖には古い平
台、折れた椅子、毛布、ビラの束、ヘルメットの残骸がある。

上手奥に黒電話。下手に小さな机。机の上にはラジオ、灰皿、湯呑
み、マツチ、地図、赤鉛筆。壁には色褪せた芝居のポスターが一枚、
剥がれかけている。外ではまだ雨が降っている。雨音は遠く、劇場
の天井にしみ込むように聞こえる。

暗がりの中で、倉田修司が椅子に座って地図を広げ、震えた手で赤
鉛筆で印をつけている。やがてラジオのつまみに手をかけ回す。外
の雨音。遠くで車の走る音。倉田は再び地図を見る。ラジオから二
ユースが流れる。

ラジオの声 昨日午後から夜にかけて、都内各所で学生団体および労働者ら
による大規模な抗議行動が行われました。一部地域では、警備にあ
たっていた機動隊との衝突が発生し、投石、火炎瓶の使用、路上で
のバリケード構築などが確認されています。警視庁によりますと、
これまでに公務執行妨害、道路交通法違反などの疑いで、学生ら数
十名が逮捕された模様です。なお、昨夜の混乱の中で、一部の参加
者の行方が確認できていないとの情報もあり、警察では関係先への
捜索を進める方針です。

倉田、ラジオの音量を少し下げ、新聞を見る。

倉田 便利な言葉だな。

ラジオの声 政府関係者は、こうした過激な抗議行動について、民主主義の
秩序を乱すものとして強く非難しており――

倉田、ラジオを消そうとするが、止まる。

ラジオの声 一方、学生団体側は、今回の行動について、国家権力による弾
圧への抵抗であると主張しており――

そこへ岡野玲子が入ってくる。片手に丸めたビラの束。もう片方の手に泥のついた靴。靴を床に置く。

岡野 裏口、誰もいなかった。

倉田 追っては。

岡野 分からない。

倉田 分からないじゃ困る。

岡野 見えなかったのよ。

倉田 見えなかったじゃ困る。

岡野 そんなこと、分かっている。

岡野、コートを脱ぎ、ビラの束を机に叩きつける。紙が崩れる。

倉田、その紙を一枚ずつ揃える。

岡野 揃えなくていい。

倉田 癖なんだ。

岡野 こんな時に。

倉田 こんな時だからだ。

岡野 寺田と北村は。

倉田 まだだ。

岡野 まだって何。

倉田 ……。

岡野 戻っていないのね。

倉田 ああ。

岡野 捕まったの。

倉田 さあな。

岡野 逃げたの。

倉田 分からん。

岡野 死んでなければいいけど。

倉田 ああ。

岡野、机の上の灰皿から吸い殻を一本取る。

岡野 誰かが言ったに違いないわ。

倉田 まだ早いだろ。

岡野 早すぎるのは警察の方よ。

倉田 だから、まだ口に出すな。

岡野 口に出さなかったら、なかったことになるっていうの。

倉田 全員が敵に見えてしまうのはわかるがここは冷静にだな。

岡野 至って冷静よ。

そこへ関谷誠が入ってくる。

関谷 全員いるか。

倉田 寺田と北村、それから三浦がまだ戻ってない。

関谷 片瀬は。

岡野 奥。

倉田 けが人はいない。

関谷 ……まあ、待ってれば来るだろ。

岡野 待つ？いつまで。

関谷 戻るまでだ。

岡野 戻らなかったら？

関谷 必ず戻る。

岡野 そういいう言い方、やめて。

関谷 何をだ。

岡野 言えば現実がついてくるみたいなその言い方。

関谷 俺たちはここに戻ってきた。そうだろ？

岡野 三人がまだ戻ってない。根拠は。

関谷 仲間だからだ。

岡野 それは理由になってない。

関谷 俺たちには根拠より先に、信じるものがあるだろ。

岡野 信じて、戻ってくるっていうの。

関谷 玲子。

岡野 何。

関谷 今、仲間割れなんかしてる場合じゃない。

岡野 仲間割れ？割ってるのは私じゃない。

関谷 疑うなど言ってるんじゃないが、今は疑い方を選べと言ってるんだ。

岡野 選んでる時間なんてあるのかしら。

倉田 あるように振る舞うしかない。あの通りに出る前から張られていた。

撤収経路の二つ目も潰されていた。偶然にしてはきれいすぎる。

関谷 見られていたか。

倉田 その可能性はある。

岡野 漏れた可能性もあるわ。

関谷 まだそうと決まったわけじゃ……。

舞台奥から片瀬直子が出てくる。手に布と湯呑みを持っている。

片瀬 お湯、まだ少し残ってる。

片瀬、机に湯呑みを置く。布で床を拭こうとする。

岡野 いい。

片瀬 滑るから。

岡野 そんなの後でいい。

片瀬 ……。

関谷 直子、奥にいろ。

片瀬 奥にいても、ここにいても、雨の音は同じだよ。

関谷 今は外のことを決めてる。

片瀬 ここは外じゃないわ。恒一は。

倉田 まだ戻ってこない。

片瀬 いつから。

岡野 通りで別れてからずっと。

片瀬 誰か見たの。

岡野 見てない。

片瀬 じゃあ、まだ分からないね。

岡野 あなたまでそれを言うの。

片瀬 分からないことを、分からないままにしてるだけ。

岡野 それが一番危ないんじゃない。

片瀬 決めつける方が危ない時もあるでしょ。

岡野 ここは学校じゃないのよ。

片瀬 学校でもないし、裁判所でもないです。

倉田が受話器へ近づく。

関谷 ……触るな。

倉田 ああ、分かってる。

**外で足音。舞台袖から三浦恒一が現れる。片手に破れたビラを持
ている。**

片瀬 恒一。

関谷 よく戻ってきたな。

三浦 ああ。

関谷 けがは。

三浦 ない。

倉田 誰かにつけられたか。

三浦 分からない。

岡野 どこにいたの。

三浦 歩いてた。

岡野 どこを。

三浦 覚えてない。

岡野 覚えてない？

三浦 ああ。

岡野 そんなわけないでしょ。

関谷 玲子。

岡野 聞いてるだけ。

関谷 戻ったばかりだ。

岡野 戻ったばかりだから聞くのよ。

倉田 三浦、最後に寺田を見たのは。

三浦 路地の入口。

倉田 北村は。

三浦 その少し先。

倉田 警察は。

三浦 見てない。

岡野 見てない？サイレンは？

三浦 遠かった。

岡野 遠かったのに、どうして戻るのがこんなに遅いの。

片瀬 どこにいたの。

三浦 劇場の前。少しだけ。

岡野 少しって？

三浦 分からない。

岡野 分からないわけないでしょ。

三浦 分からないんだよ！

沈黙。

関谷 三浦、落ち着け。

三浦 ……。

関谷 とりあえず座れ。

三浦 いい。

関谷 座れ。

三浦 いい。立っていたいんだ。

関谷 どうした？何かあったのか。

三浦 何も。

関谷 三浦、俺の目を見ろ。寺田も北村も必ず戻る。とりあえず今は体を休めろ……いいな。

岡野 決めつけないで。

関谷 玲子。

岡野 寺田も北村も戻る。三浦は何も見していない。誰も何も漏らしていない。

全部、あなたがそう言えばそうなるの？

倉田 今日はここまでだ。

岡野 はあ？逃がすの。

倉田 逃がすってなんだよ。とりあえず明日、確認する。

関谷 ……。

倉田 全員だ。誰がどこにいたか。何を見たか。何を聞いたか。寺田と北村の最後の位置。警察の動き。撤収経路。全部だ。三浦、明日話せ。

三浦 何を。

倉田 分からないことも含めてだ。

三浦 分からないものを話せるか。

倉田 話せないものが一番聞くべきことだ。

関谷 三浦。俺はお前を信じてる。

三浦 ……。

片瀬 恒一、奥で少し寝て。

三浦 眠れないんだ。

片瀬 横になるだけでいい。

三浦 いい。君こそ、もう寝たほうがいい。

片瀬 ええ、でも。あなたもよ。

三浦 大丈夫だ。俺は大丈夫だから。

黒電話が鳴る。

岡野 何。

倉田 待て、触るな。

岡野 誰から。

倉田 分からない。

岡野 寺田か北村じゃない？

倉田が受話器を取ろうとすると鳴り止む。

関谷 いや、待て。折り返してくるはずだ。明日、全員で話す。疑うなどは言わない。だが、ここから逃げるな。いいな。三浦、お前もだ。お前は、見たものを忘れない男だ。

倉田 明け方まで交代で休む。玲子は表。関谷は裏口。俺は搬入口を見張る。

岡野 三浦は。

倉田 片瀬と奥にいろ。

岡野 目を離すの。

関谷 玲子。

岡野 分かったわよ。だけど、用心なさい。

岡野は靴を拾い、舞台袖へ行く。倉田は黒電話のそばに座る。関谷は舞台中央に立ったまま、二人は奥へ消える。関谷はそれを見ている。雨音だけが残る。

暗転。

第一場 了

第二場 声

同じ空間。だが、廃劇場ではない。大学の一室のように見える。机が一つ。椅子が二つ。机の上には紙、鉛筆、数冊の本。三浦が一人で座っている。紙に何かを書いている。書いては消し、書いては消す。三浦、声に出さずに文章を読む。鉛筆が止まる。関谷が本を何冊も抱えて入ってくる。

関谷 落としたぞ。

三浦 あ、すみません。

関谷 謝るほどのものか。

三浦 いや。

関谷 原稿か。

三浦 ただの書きかけです。

関谷 ただの書きかけを、そんな顔で拾うな。

三浦 そんな顔ですか。

関谷 捨てたふりをして、誰かに拾ってほしい顔だ。

関谷、原稿を手取る。

三浦 読まないでください。

関谷 読まれたくないなら、落とすな。

三浦 落としたんじゃないくて。

関谷 捨てたのか。

三浦 違います。

関谷 お前、物書きなんだな。

三浦 ただの趣味です。

関谷 ふーん。面白そうだな。

三浦 どうですかね。

関谷 書いた本人が分からないのか。

三浦 分からないものを書きたいんです。

関谷 ほーん……。

三浦 すみません。

関谷 謝るなよ。羨ましいと思ったんだ。

三浦 羨ましい？

関谷 そうやって自分の想いみたいなものを文字に起こせることがな。

三浦 大したことないですよ。

関谷 そう謙遜するな。ここ良いか。

三浦 え？

関谷、机の上に本を置く。

三浦 革命家の本ばかり。

関谷 芝居の本もある。

三浦 並びが怖いです。

関谷 何が。

三浦 マルクスにブレヒトがいて、レーニンにゴリキーがいる。作家と革命家を同じにして持ち歩いてる人、初めて見ました。

関谷 似ているからな。

三浦 似てますかね。

関谷 どちらも、まだ存在しない人間に向かって喋っている。

三浦 まだ存在しない人間？

関谷 未来の読者。未来の労働者。未来の観客。今ここにいない誰かだ。

三浦 じゃあ、今ここにいる人間はどうするんですか。

関谷 今ここにいる人間を変えるために、未来へ向かって喋る。

三浦 回りくどいな。

関谷 近道はたいてい、逃げ道だ。

三浦 それ、あなたの言葉ですか？

関谷 レーニンだよ。

三浦 ああ。だいたい革命家の本って、声が大きいんですよ。読むだけで怒鳴られてる気がするっていうか。

関谷 怒鳴られたくないのか。

三浦 誰だって怒鳴られるのは嫌ですよ。

関谷 では、ささやかれる方がいいか。

三浦 それはそれで嫌です。近いから。

関谷 厄介だな。

関谷、本を一冊開く。

関谷 なあ、マルクスは、労働者が物を作れば作るほど、その物に支配されると言ったそうだ。

三浦 それ、少し分かります。

関谷 なぜ。

三浦 書けば書くほど、書いたものに責められる時があるから。

関谷 ほう。

三浦 自分で書いたくせに、お前は本当にそう思ってるのかって聞かれるというか。

関谷 それはいい文章だ。

三浦 嫌な文章です。

関谷 いい文章は、たいてい嫌なものだ。

三浦 じゃあ俺は、いい文章を書きたくない。

間。

関谷 君は、なかなか意地が悪いな。

三浦 あなたほどじゃない。

関谷 俺は意地が悪いのではない。諦めが悪い。

三浦 同じに聞こえます。

関谷 違う。

三浦 どう違うんですか。

関谷 意地の悪さは人を試す。諦めの悪さは世界を試す。

三浦 詩にしたがるんですね。

関谷 これは詩ではないよ。武器だ。

三浦 武器？言葉が？

関谷 そうだ。

三浦 じゃあ作家は、みんな武器商人ですか。

関谷 ある意味では。

三浦 ブレヒトも？

関谷 ああ。

三浦 ゴーリキーも？

関谷 もちろん。

三浦、机の本を手取る。

三浦 ゲオルク・ビューヒナー。

関谷 知ってるか。

三浦 名前だけ。早死にした人ですよ。

関谷 そうだ。

三浦 早死にした作家って、ずるいですよ。途中で終わっただけなのに、完成して見える。

関谷 未完の方が、人は続を見たがる。

三浦 じゃあ、死んだ人間の方が本になるってことだ。

関谷 今のは、君の言葉か。

三浦 まあ。

関谷 昔、古びた小さな劇場で、ビューヒナーの『ダントンの死』を観たんだ。

三浦 どんな芝居ですか。

関谷 フランス革命の話だ。勝ち取った革命の中で殺されてしまう男の話だ

三浦 勝ったのに殺された？

関谷 ダントンは民衆を煽り、王を倒し、血の上に新しい時代を立てた。だが、やがてその革命は邪魔なものになった。昨日まで仲間だった者たちは正義を叫ぶこと、革命であり続けることに疲れてしまったんだ。するとロベスピエールが正しい世の在り方を民衆に語りかけ、新たな正義を示した。結果的にダントンは法で裁かれ処刑されてしまう。

三浦 ……嫌な芝居ですね。

関谷 嫌な芝居だ。

間。

関谷 誰もが、自分の正しさや自分の言葉を持っている。悪人でさえな。

勝ったはずの革命が、勝った者たちを食い始めるんだ。

三浦 革命が、革命家を殺す……何が残るんですか。そんな芝居を観て。

関谷 声だ。

三浦 声？

間。

関谷 人間は、首を落とされる直前まで喋れる。自分が何者だったのか。

何を信じたのか。それが自分の言葉だったのか、最後の最後に試される。

三浦 それが『ダントンの死』？

関谷 俺には、そう聞こえた。

三浦 怖いですね。

関谷 怖いさ。

三浦 じゃあ、どうしてそんなものを忘れずにいるんです。

関谷 忘れたら、黙って死ぬことになる。

間。

三浦 俺は、黙って生きる方が怖いです。

関谷 今のはいい声だ。

三浦 またそれですか。

関谷 置いていくなよ。

三浦 何を。

関谷 今の言葉だ。

廊下の向こうを誰かが走る音。

三浦 何ですか。

関谷 時間だ。

三浦 授業？

関谷 集会だ。

三浦 何の。

関谷 討論では終わらない集まりがあるんだ。

三浦 それは、討論じゃないんですか。

関谷 討論は入口だ。入口に住みついてはいけない。

三浦 ……。

関谷 場所を変える。

三浦 俺には関係ない。

関谷 そう思うなら、ここに残ればいい。

三浦 誘ってるんですか。

関谷 誘っているように聞こえたか。

三浦 そう聞こえました。

関谷 なら、誘っている。

三浦 雑だな。

関谷 丁寧に誘うと、断りやすくなる。

三浦 断っていいんですか。

関谷 もちろん。

三浦 じゃあ断ります。

関谷 ……分かった。

関谷、本をまとめる。

三浦 引き止めないんですか。

関谷 来ない人間ってのはとくに帰ってる。

三浦 ……。

関谷 来るなら、自分で来い。関谷誠だ。

三浦 え？

関谷 名前だよ、関谷でいい。お前は。

三浦 三浦……恒一。

関谷 三浦恒一。よろしくな三浦。

入口から、岡野玲子が入ってくる。続いて倉田修司。岡野は紙束を抱えている。倉田は時計を見ている。

岡野 誠、時間よ。その人は？

関谷 三浦恒一。

三浦 ……どうも。

倉田 知り合いか。

関谷 今、知りあった。

倉田 今？

岡野 誠、外に人が増えてる。急ぎましょう。

倉田 場所を変える。ここに長くいない方がいい。

関谷 分かった。

倉田 三浦、だったな。倉田修司だ。

三浦 よろしく。

倉田 無理に来る必要はない。

関谷 倉田。

倉田 何だ。

関谷 君はいつもそうやって出口を作りたがるな。

倉田 出口のない部屋は危ないんだよ。

岡野 行くよ、誠。あんたは、どうすんの？来るの来ないの。

三浦 俺は……。

関谷 決めるのは君だ。

三浦、紙を取る。折って、ポケットに入れる。

三浦 俺、行きます。

関谷 いいだろ。

岡野 じゃあ急いで。

関谷、本を抱える。

四人、出口へ向かう。

暗転。

第二場 了

第三場 査問

廃劇場。正午を過ぎた頃。

第一場よりも少し片づけられている。

遠くで車の音。遠くで笛のような音。

倉田が椅子に座っている。地図、メモ、鉛筆、煙草の箱を机に置く。岡野は椅子に座らず、机の周りを歩いている。

関谷は舞台中央から少し離れた場所に立ち、客席の間を背にしている。

片瀬は下手寄りに立っている。

倉田 じゃあ始めるぞ。

岡野 肝心の本人がいないじゃない。

倉田 呼んだよ。

岡野 来るかしら。

関谷 来る。

岡野 またそれ。

関谷 来るんだ。

岡野 あなたが言うのと、来なきゃいけないみたいに聞こえるね。

関谷 来なきゃいけないだろ。

沈黙。

舞台袖から三浦が現れる。手に紙を持っている。

三浦 遅れた。悪い。

倉田 座れ。

三浦 昨日のことを整理してきた。

岡野 整理？

三浦 聞かれると思ったから。

岡野 用意がいいのね。

三浦 曖昧に話せば、余計な混乱を招くだろ。

倉田 この紙は。

三浦 時刻と場所を書いた。必要なら読む。

岡野 まるで報告書ね。

三浦 報告だろ。

岡野 いいえ、これは尋問よ。

三浦 なら、なおさら正確に話す必要がある。

関谷 無理に整えなくていい。

三浦 整えないと、話にならないだろ。

関谷 俺たちは、お前の言葉を聞きたい。
三浦 言葉なら用意した。

三浦は椅子を引く。

三浦 始めよう。
倉田 関谷も座れ。
関谷 俺はここがいい。
倉田 駄目だ。今日は誰も上に立つな。
関谷 だから俺は……。
倉田 座れ。

関谷、座る。

倉田 記録する。昨日、集合時間は午後四時二十分。場所は東口裏の倉庫前。
寺田、北村、岡野、三浦が先行し俺と関谷は別経路。片瀬はここに
残っていたな。

片瀬 はい。

倉田 行動開始は五時十二分。

岡野 五時二十二分には警察が動いていた。

倉田 早すぎた。

岡野 早すぎるには理由がある。

関谷 偶然もある。

岡野 偶然で寺田と北村が消えたなら、私たちは何を信じればいいの。

三浦 だから確認する。誰かを疑うためじゃなく、疑いを減らすために。

岡野 ずいぶん真面目ね。

三浦 真面目に話すしかないだろ。

岡野 その真面目さが、今は少し怖い。

三浦 怖がらせるつもりはない。

岡野 つもりの話はしていない。

倉田 三浦。五時二十分、お前はどこにいた。

三浦 中通りから一本入った裏路地だ。煙草屋の角を曲がった先だ。

倉田 細かいな。

三浦 思い出せる範囲で書いた。

岡野 寺田とは一緒だった？

三浦 最初はな。

岡野 最初は？

三浦 途中で別れたんだ。

倉田 なぜ。

三浦 人が来た。

岡野 誰。

三浦 知らない男だ。

岡野 知らない男？顔は見た？

三浦 ああ。

岡野 覚えているの？

三浦 覚えている。四十前後。背は俺より少し低い。紺の背広。帽子を被ってた。顔は……特徴が薄い。

岡野 どこにでもいる顔ほど、どこにもいないのよ。

倉田 その男を見て、寺田は何と言った。

三浦 先へ行け、と。

倉田 お前は。

三浦 向かった。

岡野 寺田を置いて？

三浦 配置では、寺田が判断する場面だった。俺は北村との合流を優先した。

岡野 それで、寺田を置いて逃げた。

三浦 違う。

岡野 違うなら、どこへ向かったの。

三浦 裏手に回り込もうとした。

岡野 それで一人で戻った？

三浦 そうだ。

岡野 きれすぎる。

三浦 何？

岡野 抜け落ち方がきれすぎるのよ。

片瀬 玲子さん。

岡野 そこにいなかったあんたは黙ってて。

片瀬 私だって計画を知ってる一人よ。

倉田 片瀬。三浦、お前は昨日、街が変だと思ったか。答えろ。

三浦 ……思った。

岡野 いつのタイミングだ。

三浦 路地へ入る前。午後五時十五分前後。

倉田 寺田と別れる前か。

三浦 ああ。

岡野 なぜ言わなかったの。

三浦 確かじゃなかった。

岡野 どういうこと？

三浦 静かだったんだ。

岡野 静か？

三浦 いつもなら店のラジオが聞こえる。酔っ払いの声も、車のブレーキも、

子供の声も。だが、昨日は何もなかった。

倉田 張られている静けさというわけか。

三浦 分からない。

岡野 分からないと言えばよかった。

三浦 分からないことで全員を止める判断はできなかった。

岡野 止めれば寺田は戻ったかもしれないじゃない。

三浦 可能性はあるが。

岡野 可能性？

三浦 否定はしない。

岡野 そんな言い方で済ませるの。

三浦 済ませていない。認めてるさ。

岡野 あなたが置いたのよ。

三浦 違うっていつてるだろ。

関谷 そこまでだ。

岡野 いいえ。ここからよ。

関谷 これ以上追い詰めても事実が出ない。

岡野 追い詰めないと出ない事実もあるでしょ。

関谷 三浦は仲間だぞ。

岡野 は？仲間なら、何やっても許されるの？

関谷 確信がなかったんだ。そうだろ？

三浦 やめろよ。

関谷 何だと？

三浦 俺の代わりに答えなくていい。

関谷 俺はお前をかばっているわけじゃない。

三浦 分かってる。

関谷 なら。

三浦 ここでは俺が正確に説明する。お前が俺を信じていることと、昨日何が起きたかは別だ。

岡野 正確な人は、自分が正確だと言わないわ。

倉田 続ける。

三浦 俺は昨日、静かだと思った。危ないとも思った。寺田に言うべきだったかもしれない。だが、言わなかった。理由は二つある。一つは確証がなかったこと。もう一つは、俺自身が止める責任を負うのを恐れたことだ。

関谷 責任？

三浦 そうだ。止めろと言えば、俺はその後の全部を背負わなきゃならない。行けと言えば、進んだ後の全部を背負わなきゃならない。俺はどちらも選ばなかった。俺は臆病だった。怖かったんだ。止めるのも、進むのも、戻るのも怖かった。だから何も言わなかった。これは弁解じゃない。それが事実なんだ。

岡野 あんたは分かってない。

三浦 分かってる。

岡野 分かっていない。

三浦 分かってるさ。

岡野 いいえ、分かってない！分かっていたら、そんな顔で座っていられない。

三浦 じゃあ、どんな顔で座ればいい。

岡野 血を吐くような必死な顔よ。何かにしがみつきそうな、泣いてる顔よ。
三浦 そういう顔を作れば、君は納得するのか。俺が泣けば、事実が増えるのか。

倉田 なら事実へ戻れ。

三浦 だから何度も言ってるだろ。事实は、俺が異変を感じながら報告しなかったことだ！ただそれだけのことだ！

岡野 本当に？

三浦 本当だって言ってるだろ。

岡野 誰かに会っていない？

三浦 会っていない。

岡野 公安に接触していない？

三浦 していない。

岡野 何も渡していない？

三浦 渡していない。

岡野 じゃあその後は？

沈黙。

三浦 その後……その後は。覚えてない。

岡野 戻ってくるのが遅かったのはどうして。

関谷 玲子。

岡野 黙ってて。

三浦 俺を疑ってるのか。疑い続けていないと、自分が保てないのか。

岡野 そうよ！怖いよ。三浦。あんたがね。寺田が戻らない。北村も戻らない。次は誰か分からない。外が怖い。中也怖い。あんたの沈黙が怖いよ。関谷も倉田も片瀬さんだって怖い。全部怖いよ。もうこれ以上仲間を失いたくないから必死になるのは怖いからに決まってるでしょ。それ以外にあるっていうの。

沈黙。

片瀬 もうやめましょう。

岡野 いいや、やめないわ。やめたら、あいつらに顔向けできない。

倉田 もういい。やめよう。

岡野 あなたまで言うの。

倉田 そんなじゃない。とにかく今は冷静に話し合うべきだ。だがいつまでもこうしてはいられない。どうしていかを考えなければならないんだ。三浦、お前の話はだいたい分かった。ならこうする。次の行動から三浦を外す。

関谷 ……待てよ。

倉田 外すんだ。三浦、お前の話は聞いた。だが、疑われるようでは危険だ。

これ以上はリスクを負いたくない。とりあえずはお前はここに残れ。いいな。

三浦 ……。

岡野 監視は。

倉田 必要ない。

岡野 必要よ。あんたを信じないためじゃない。あんたに何もさせないためよ。

倉田 ……。

三浦 異議を言える立場じゃない。

関谷 三浦を外すなら、俺も。

倉田 それは許さない。

関谷 なぜだ。

倉田 お前が外れたら、俺たちが困る。

関谷 では三浦だけ切るのか。

倉田 切るんじゃない。

関谷 同じ意味だ。三人で何ができる？

倉田 同じ意味でも、外す。俺たちで何とかするんだ。

沈黙。

三浦 少し席を外す。

岡野 駄目。逃げる気でしょ。

三浦 逃げない。一人で整理したいだけだ。

関谷 どこへ行く。

三浦 どこにも。

関谷 なら。俺が見張る。

三浦 関谷。今だけは俺のことを信じる材料にはしないでくれ。

関谷 ……俺はお前を見捨てたりなんかしない。

三浦 ……分かってる。

三浦は舞台袖へ去る。

片瀬は三浦の去った方へ去る。

舞台上に、関谷、岡野、倉田が残る。

岡野 片瀬さんも、危ないわ。

倉田 ……。

関谷 彼女は敵じゃない。

岡野 敵じゃない人が、一番壊すことだってあるのよ。

倉田 関谷。

関谷 何だ。

倉田 お前も少し休め。

関谷 休んでいる時間なんてない。

倉田 休まない人間は、判断を間違える。頭を冷やせ。

関谷 俺は間違えない。

倉田 そう言った時が一番危ないんだ。

黒電話が鳴る。

岡野 またよ。

倉田 ……。

関谷 俺が出る。

倉田 よせ。まだ分からんぞ。

関谷 折り返してきたんだ。きっと寺田たちだ。

関谷、受話器を取る。

関谷 誰だ。

沈黙。

関谷 ……切れた。

沈黙。

関谷 ……くそ。どうなってんだ。

岡野 行きましょう。じきに日が暮れるわ。

岡野、鞆とチラシを持って去っていく。倉田と関谷もあとに続く。

三浦の座っていた椅子だけが少しずれて残る。

暗転。

第三場 了

第四場「小銭と切符」

同・夜

舞台には、薄暗い明かり。上手に黒電話。中央に机と椅子。奥に
緞帳。三浦、並べられた椅子の上で横になつてゐる。奥から片瀬
が入ってくる。魔法瓶と小さな包みを持っている。

片瀬 恒一。

三浦 ……直子。

片瀬 眠れた。

三浦 いいや。

片瀬 そう。

三浦 関谷の言つた通りだ。

片瀬、魔法瓶を机に置いて椅子に座る。

片瀬 恒一。

三浦 何。

片瀬 逃げよう。

沈黙。

三浦 今、何て。

片瀬 逃げよう。

三浦 冗談だろ？

片瀬 冗談じゃない。

三浦 逃げるつてどこへ。

片瀬 ここじゃない場所へ。

三浦 答えになつてない。

片瀬 答えだよ。

三浦 それは……できない。

片瀬 なぜ。

三浦 裏切り者になる。

片瀬 うん。

三浦 うんつて。

片瀬 裏切り者でいい。

三浦 お前自分の言つてることが分からないのか。

片瀬 分かつてるとは言わない。でも、生きてる裏切り者の方がましつ
て言つてゐるのよ。

沈黙。

三浦 簡単に言うなよ。

片瀬 でも、ここにいたら、恒一は死ぬ。

沈黙。

三浦 死なない。

片瀬 死ぬの。

三浦 決めるな。

片瀬 見てれば分かる。

三浦 直子。

片瀬 関谷さんは、恒一を生かそうとなんてしてない。

三浦 そんなこと。

片瀬 声を残そうとしてるだけ。

沈黙。

片瀬 声が残っても、恒一がいなかったら、何の意味があるの。

三浦 意味なんか。

片瀬 私は意味よりもあなたが大事。

片瀬、財布を開く。小銭を取り出す。

片瀬 これ。

三浦 何。

片瀬 持って。

三浦 小銭？

片瀬 うん。それとこれ。

列車の切符を差し出す。

三浦 これって。

片瀬 駅まで走って。改札を抜けて。来た電車に乗って。

三浦 どこ行きだよ。

片瀬 どこでもいい。ここじゃない場所なら、どこでもいい。できるだけ遠くに。

片瀬、三浦の手に小銭と切符を握らせる。

三浦 俺だけ？直子は。

片瀬 先に行って。私も行くわ。

三浦 嘘だ。

片瀬 嘘じゃない。

三浦 じゃあ、今一緒に。

片瀬 駄目。

三浦 何で。

片瀬 私も今一緒にいなくなったら、すぐに分かる。

三浦 分かったら何だよ。

片瀬 追われる。

三浦 だったらなおさら一緒に。

片瀬 先に行って。

三浦 嫌だ。

片瀬 お願ひ。

三浦 嫌だよ。

片瀬 駅を二つ越えたところ。

三浦 何。

片瀬 改札を出ないで。ホームの端にいて。私、必ず行くから。

三浦 必ず？

片瀬 ええ、必ず。

三浦 信じられない。

片瀬 信じなくていい。でも待ってて。これは、革命を捨てるお金じゃ

ない。生きるためのお金なの。

三浦 ……。

沈黙。

三浦 直子も裏切り者になる。

片瀬 平気。

三浦 怖くないのか。

片瀬 怖いけど、ここにいる方がもっと怖い。

三浦 ……。

片瀬 時間がない。駅まで歩いて。電車に乗って。ホームの端で待つて。

私。私も絶対に行く。

三浦 嘘ついたら。

片瀬 味噌汁、三日分おごる。

三浦 なんだよそれ。

片瀬 じゃあ、卵もつける。

三浦 こんな時に、飯の話かよ。

片瀬 大事よ。

三浦 革命より？

片瀬 革命より。はるかに。

沈黙。

三浦 関谷が聞いたら怒る。

片瀬 怒らせておけばいい。

三浦 岡野も。

片瀬 玲子さんは、たぶんもつと怒る。

三浦 倉田は。

片瀬 倉田さんは、たぶん駅までの時間を計算するんじゃない。

三浦 (小さく笑いながら) なんだよそれ。

片瀬 その顔。

三浦 え。

片瀬 笑ってるその顔。私はその顔が好きなのよ。

沈黙。

片瀬 行つて。

三浦 直子。

片瀬 お願い。行つて。

三浦 俺は。

片瀬 恒一。

三浦 ……。

片瀬 こんな革命、降りるの。明日を生きるのよ。ふかふかの布団で寝て、温かい朝ご飯を食べるの。

沈黙。

三浦、小銭と切符を持って出口へ向かう。

三浦 直子。

片瀬 何。

三浦 来なかつたら、戻る。

片瀬 駄目。必ず来るから戻ってこないで。お願い。

三浦 ……分かった。

三浦、退場。片瀬は出口を見つめている。

長い沈黙。

片瀬 ……お金、もつとあればよかったな。

片瀬、財布の中から切符を一枚取り出す。

片瀬 電車賃と、朝ごはんくらい。それだけで人が助かるなら、革命より安いわ。

沈黙。

片瀬 安保とか、権力とか、総括とか、同志とか。みんな、どうしてそんなに大きい言葉を、毎日口にできるんだろう。

間。

片瀬 米を何合炊くとか。味噌汁、薄かったかなとか。ちゃんと食べたとか。私はそういうことばかりで。でもね、そういうことをしないと、人ってすぐ死ぬ。

沈黙。

片瀬 今だけでいいから。

片瀬、奥へ向かう。

舞台上、財布だけが残る。黒電話。魔法瓶の置かれていた跡。床に一枚だけ落ちた小銭。
しばらく沈黙。

黒電話が鳴る。関谷誠が入ってくる。受話器を取る前に鳴りやんでしまう。床の小銭を拾う。

関谷 ……小銭。

関谷、小銭を指で転がす。

関谷 小さい音だ。

関谷、机の端の財布に気づく。手に取る。財布を開ける。

関谷 ……誰のだ。

沈黙。

関谷 直子の身分証……まさか。

関谷、切符を取り出す。

暗闇。

薄く明かりが入る。

舞台上手に、電話ボックスのように見える。実際の電話ボックスはない。古い公衆電話を思わせる受話器だけが、闇の中に浮かぶ。
三浦がいる。小銭と切符を握っている。

三浦 朝まで生きるお金、だつてさ。直子。これじゃ、どこにも行けないよ。駅を二つ越えたところ。改札を出ないで。ホームの端。

間。

三浦 ホームの端つて、どっちの端だよ。俺、そういうの、いつも聞きそびれるんだよな。ここじゃない場所なら、どこでもいいって。
どこまで行けば、別の人間になれるんだろうな。

間。

三浦 戻れば、総括だ。戻らなければ、逃亡だ。

受話器に手をかける。

三浦 寺田。北村。俺は、置いてきたのか。見失ったのか。見ないことにしたのか。直子……すまない。

小銭を入れる音。受話器を取る。遠い通話音。無機質な音。

三浦 ……もしもし。中核派が動く。

沈黙。

三浦 ああ。俺が何をしようとしてるか。

沈黙。

三浦 便利だな……。

沈黙。

三浦 違う。俺は仲間を売りたいわけじゃない。

沈黙。

三浦 止めたいただけなんだ。これ以上、誰も消えないように。あんたなら止められるんだろ。

沈黙。

三浦 明け方だ。午前四時四十分。東栄町の旧印刷工場裏でゲリラが行われる。搬入口から入る。人数は、三人。その前に止めるんだ。今は東栄町の使われなくなった廃劇場に潜伏中だ。

沈黙。

三浦 なんだと……なぜだ……教えた？

沈黙。

三浦 ……誰のことを言ってるんだ。そんな……まさか……俺は事実を言ってる。俺だけが助かりたいんじゃない……殺すなよ。どういうことだ。おい聞いているのか——

沈黙。受話器の向こうの気配が消える。三浦はしばらく受話器を耳に当てたまま動かない。やがて、ゆっくり受話器を置く。舞台上手に向かって歩き、ポケットから紙切れを取り出す。

照明が変わり、ラジオから報道の声が入る。

しばらくして、関谷誠が入ってきてピラを揃えている。

ラジオの声 本日午後、都内中心部では、日米安全保障条約に反対する学生団体、労働組合、市民団体らによる大規模な抗議行動が行われました。参加者らは、安保条約の継続に反対し、米軍基地の撤去、政府による強行的な政治運営への抗議を訴えながら、国会周辺および主要駅前に集結しました——

三浦 まただ。

関谷 何が。

三浦 ラジオ。いつも同じ言い方をする。過激な行為。公共の安全。秩序。混乱。全部同じ声になる。

関谷 だから、自分の声を持つんだよ。

三浦 持ったところで、誰が聞くんだ。

関谷 俺は、聞いたことがある。

三浦 何を。

関谷 自分の言葉だけで群衆の前に立つ声を。

三浦 声？

関谷 こないだ、東大の駒場に三島由紀夫が来た。全共闘の連中が、教室を埋めていた。俺は後ろにいた。前に出る勇氣なんてなかったからな。

三浦 三島由紀夫って、あの三島？

関谷 あのと三島だ。

三浦 珍しいな、お前がそんなところ行くなんて。

関谷 別に、喋りに行った人間を見に行っただけだ。

三浦 ほお。

関谷 敵ばかりの場所に、一人で来る。笑われても、遮られても、逃げない。右だ、左だ、天皇だの、革命だの、そんな看板より先に、俺にはそれが見えた。人間が、自分の言葉の前から逃げない姿だ。

三浦 それで、どうだったんだ。

関谷 そうだな……怖かったな。

三浦 怖かった？

関谷 ああ。言葉で人はあそこまで裸になれるのかと思った。服を脱ぐより、殴り合うより、もっとだ。自分が何を信じているのか。何を捨てられないのか。それらを、人前で差し出すんだ。

三浦 馬鹿みたいだな。

関谷 ああ、馬鹿みたいだ。でも、そういう馬鹿みたいなことをしないと、世界は何も聞いちゃくれない。

三浦 世界って、そんなに耳が悪いのか。

関谷 まあな。

沈黙。

関谷 まだ持ってたのか。

三浦 何を。

関谷 紙だよ。

三浦は手の紙を見る。

三浦 捨て忘れただけだ。

関谷 捨て忘れた紙は、そんな持ち方をしない。

三浦 持ち方まで見てるのか。

関谷 見るだろ。隣にいるんだから。

三浦 気味が悪い。

関谷 悪かった……読めよ。

三浦 なんだよ。

関谷 いいから。

間。

関谷 分かった。

関谷、紙を手取る。

関谷 「名前をつけられた場所では、いつも先に決められている。誰かが間違った方向へ走っていくなら、その背中に向かって声を投げる。止まれ、と。理由がうまく言えなくても、それでも止まれ、と。その声が届かなかつたら、きつと人は、自分の声を嫌いになる。でも、それでも、黙って見送るよりはましだ」……いい台詞だな。

三浦 どこが。

関谷 逃げようとしてるのに、道を作ろうとしてる。

三浦 矛盾してるだろ。

関谷 矛盾してるから、人間なんだ。まっすぐな言葉は、旗になり、折れた言葉は、誰かを引き上げる手になる。もっとも人間らしい。

三浦 誰かを引き上げる手か。

沈黙。

関谷 そうだ。お前に見せておかなきゃいけないものがある。

三浦 何を。

関谷は机の上の布をほどく。中から小さな拳銃が現れる。

三浦 それ、本物か？

関谷 玩具に見えるか。

三浦 見えない。

関谷 なら本物だ。

三浦 どうして、そんなものがここに。

関谷 必要になる時が来るかもしれん。

三浦 弾はあるのか。

関谷 これは撃たないために持つ。

三浦 ということだ。

関谷 ここにいる人間を守るためだ。

三浦 人を守るために、人を殺すものを置くのか。

関谷 そういう矛盾から逃げたら、何も守れない。

三浦 俺は逃げたいね。

関谷 今は逃げてもいい。だが、いつか逃げられない時が来る。

三浦 その時にはこれを？

関谷 持つかどうかは、その時の人間が決める。

三浦 ずるいな。

関谷は拳銃を見下ろす。

関谷 怖いか。

三浦 怖い。

関谷 それでいい。「徳なき恐怖は破滅。恐怖なき徳は無力」だ。

三浦 関谷……お前。

関谷 なんてな。

拳銃を再び布で包み、机、あるいは戸棚の中にしまう。

関谷 この話は、ここで終わりだ。

三浦 なあ、関谷。

関谷 何だ。

三浦 いつか俺が止まれと言ったら、止まってくれるか。

関谷 理由にもよる。

三浦 理由がうまく言えなかったら？

関谷 聞いてやるよ。

三浦 なら、覚えておいてくれ。

関谷 何を。

三浦 俺がうまく言えない時は、たぶん本当に危ない時だ。

間。

関谷 覚えておく。

三浦 本当か。

関谷 ああ。

三浦 忘れるなよ。

関谷 忘れないさ。

照明がゆっくり変わる。関谷はいない。三浦だけが残る。

三浦 お前はもう忘れてしまったんだよ。何もかも……。

暗転。

第四場 了

第五場 拭う

廃劇場。同夜。

関谷、机の上の小銭を指で弾く。片瀬が入ってくる。片瀬は関谷が
いることに気づき、止まる。

片瀬 関谷さん。

関谷 直子。

片瀬 それ。

関谷 落とし物だ。

片瀬 返してください。

関谷 中を見た。

片瀬 返してください。

関谷 切符が入っていた。

沈黙。

関谷 一枚だけ。

片瀬 ……。

関谷 もう一枚は、あいつに渡したのか。

片瀬 ……。

関谷 三浦はどこだ。

片瀬 知りません。

関谷 この行き先は。

片瀬 決めてません。

関谷 時刻は。

片瀬 分かりません。

関谷 答えろ。どこへ行くつもりだ。

片瀬 ここじゃない場所へ。

関谷 それは答えになっていない。

片瀬 答えです。

関谷 疑わなければならない。総括だ。

片瀬 私には関係のないことです。

関谷 君は優しいな。優しさは、時々、革命より人を惑わせる。

片瀬 革命の方が、人を惑わしています。

関谷 君に何が分かる。

片瀬 分かりません。

関谷 なら黙れ。

片瀬 でも、ここにいるみんな苦しんでる。

関谷 苦しみは必要だ。

片瀬 必要じゃありません。

関谷 苦しみを越えて、人は自分の声を持つ。

片瀬 そうやって、何人壊すんですか。

関谷 壊れているのはこの世界だ。

片瀬 違います。

沈黙。

片瀬 関谷さん。あなたが壊れてる。

長い沈黙。

関谷 俺が？

片瀬 はい。

関谷 君に、私の何が分かる。

片瀬 分かりません。

関谷 なら、なぜ言える。

片瀬 見えるからです。

関谷 何が。

片瀬 関谷さんは、みんなを見ていない。

関谷 見ている。

片瀬 いいえ、見ていません。

関谷 俺がお前たちを見つけた。

片瀬 私たちは、見つけ物じゃありません。

関谷 俺が声を与えたんだ。それに答えたのは君たちだ。

片瀬 違います。

関谷 いいや、違わない。

片瀬 関谷さんが与えたのは声じゃない。

沈黙。

片瀬 私たちはずっと、あなたの芝居に出されていただけです。

関谷 黙れ。

片瀬 革命を愛してるんじゃない。

関谷 黙れ。

片瀬 革命家として、誰かに見てほしかったんですよね。

関谷 黙れ。

片瀬 恒一に。玲子さんに。倉田さんに。

関谷 黙れ！

沈黙。

片瀬 私たちは、あなたを本にする人じゃありません。

関谷 直子。

片瀬 あなたを歴史に残す人じゃありません。

関谷 直子。

片瀬 あなたを革命家にしてくれる人じゃありません。

沈黙。

関谷 君は、何も知らない。

片瀬 はい。

関谷 俺たちが初めて声を出した時を、君は知らない。

片瀬 知りません。

関谷 ここに立った時の俺たちを知らない。

片瀬 ええ。

関谷 俺たちの声が、この場所に残った瞬間を知らない。

片瀬 ……。

関谷 なぜ奪える。

片瀬 関谷さんの知っている皆を、私は知りません。革命の言葉を読もうが、声を響かせようが、私は知りません。

間。

片瀬 でも、もがき苦しみ、痛みに耐えながら、ご飯もまともに食べずに必死に我慢してるのを知ってる。革命を恐れるようになってるのを知ってる。岡野さんも倉田さんも恒一でさえ自分を守るのに必死なのが伝わる。関谷さんだってそうでしょ。それで十分です。私はもう耐えられない。ずっと支えてきたつもりでしたが見て見ぬしてただけだった。もう限界です。みんなを……解放してください。

関谷 愚かだ。君はなんて愚かな女なんだ。

片瀬 愚かでしょうね。でも毎日在必死に生きようとする人間であるには間違いなんてない。私は先のない未来を生きるより、明日もご飯を食べて生きていられる世の中にいたい。ただそれだけです。

沈黙。

黒電話が鳴る。

片瀬 出ないんですか。

関谷 誰だと思う。

片瀬 恒一かもしれません。

関谷　なら、なおさら出ない。

片瀬　どうして。

関谷　三浦が帰る場所は、電話の向こうではない。

片瀬　もう、ここでもありません。

関谷　何？

片瀬　恒一はもう戻ってきません。

関谷　やはりな。愚かだ。三浦は必ず戻る。だが、君のところへではない。

黒電話が鳴りやむ。

関谷、片瀬へ近づく。

片瀬　関谷さん。

再び黒電話が鳴る。

関谷　優しさは、時々、裏切りより残酷だ。

片瀬　違います。

関谷　違う。

関谷、片瀬の首に手をかける。

片瀬　関谷さん、やめて。離して。

関谷　……。

魔法瓶が倒れる。財布が落ちる。小銭が床に散る。

黒電話の音が鳴りやむ。

片瀬が倒れている。あるいは、緞帳の影に片瀬の身体の一部だけが見える。

長い沈黙。

関谷　直子。違う……違う。これは、違う。

黒電話が鳴る。

関谷、片瀬の身体を抱える。

関谷　静かにしろ。

関谷、片瀬の亡骸を担ぐ。片瀬を舞台奥へ運ぶ。

黒電話が鳴り続ける。

暗転。

第五場　了

第六場 包囲

廃劇場。夜明け前。

舞台には第五場の残骸が残っている。遠くでサイレンのような音。
あるいは、風。岡野が舞台中央にいる。机の周りを歩いている。

三浦が入ってくる。手には小銭と切符。

岡野 三浦……どこに行ってたのよ。

三浦 そういうあんたも、どこにいた。

岡野 何。

三浦 どこにいたって聞いているんだ。

岡野 あんたこそ、どこに行ってたの。

三浦 先に答えろ。

岡野 何なの、その言い方。

三浦 覚えがあるだろ。

沈黙。

岡野 ないわ。

三浦 ないだと？

岡野 何を知ってるの。

三浦 俺が聞いている。

岡野 答える義務はない。

三浦 あるはずだ。昨日、五時二十二分には警察が動いていた。

岡野 ……。

三浦 早すぎた。

岡野 だから何。

三浦 早すぎるには理由がある。そう言ったのは、君だ。

沈黙。

岡野 三浦。

三浦 誰かが言ったに違いない。そう言ったのも、君だ。

岡野 やめて。

三浦 やめない。

岡野 あんたには、私を責める資格なんかない。

三浦 資格がないから、聞いているんだ。

沈黙。

三浦 どこで会った。

岡野 誰に。

三浦 男だよ。

岡野 知らない。

三浦 四十前後。背は俺より少し低い。紺の背広。帽子を被ってた。顔は、特徴が薄い。

岡野 ……。

三浦 どこにでもいる顔ほど、どこにもいない。君が言った。

岡野 やめてって言ってるでしょ。

沈黙。

三浦 撤収経路を言ったのか。

岡野 は。

三浦 時間は。

岡野 言ってない。

三浦 東口裏の倉庫前。

岡野 知らない。

三浦 旧印刷工場裏。

岡野 知らない。

三浦 此処のこと。

岡野 知らないって言ってるじゃない！

三浦 じゃあ、どうして向こうは知ってたんだ。

沈黙。

岡野 向こう？

三浦 電話の向こうだよ。

岡野 あんた、電話したの。

三浦 ああ。

岡野 誰に。

三浦 警察に。

岡野 何を言ったの。

三浦 全部。

岡野 最低ね。

三浦 知ってる。

岡野 仲間を売ったんだ。

三浦 止めたかったただけだ。

岡野 みんなそう言うのよ。

三浦 君もだろ。

沈黙。

岡野 ……。

三浦 君も、そう言ったのか。止めたかったって。

岡野 違う。

三浦 何が。

岡野 あんたとは違う。

三浦 何が違う。向こうは言った。女が先に喋ったって。

岡野 ……。

三浦 ビラを持っていた。

岡野 ……。

三浦 撤収経路を知っていた。

岡野 ……。

三浦 岡野。

岡野 呼ばないで。

三浦 玲子という女から聞いたと。

岡野 呼ばないで！

三浦 君だったのか。

沈黙。

岡野 ……止めたかったのよ。関谷も、倉田も、寺田も北村も。全部。関谷は進めと言うし倉田は正しくあれっていつも言う。寺田と北村は、それを笑ってた。みんな、怖がってるくせに、怖くないふりをしてた。だから私は。

三浦 だから売ったのか。

岡野 売ってなんかいない。

三浦 君は言ったんだ。

岡野 違う。止めるためよ。

三浦 同じだ。

岡野 同じじゃない！

三浦 同じだ。俺も、そう言ったからな。

沈黙。

岡野 ……寺田も、北村も。捕まれば、止まると思った。ここまで来れば、関谷も諦めると思った。それだけだった。

三浦 俺は、君を疑ってなかった。

岡野 嘘。

三浦 疑ってなかった。君が俺を疑うから、俺は自分を疑った。君が俺を見るたびに、俺は自分の中に裏切り者を探した。でも違った。君は俺を見てたんじゃない。君は、君自身を見てたんだ。

沈黙。

岡野 ……私を裁く気。

三浦 いいや。

岡野 じゃあ、どうするの。

三浦 ここから出る。直子と俺と一緒に。

岡野 ……あんた、自分が何を言ってるのかわかってるの。そんなこと

したら関谷が必ず私たちを許さないわ。

三浦 許されないだろうな。でも、ここにいても、変わらない。そうだ

ろ。明日を生きるんだ。

岡野 ……私は、私はどうすればいいの。

倉田が入ってくる。手に地図と鞆。

倉田 戻っていたか。外の様子がおかしい。いつにもまして静かだ……

とりあえずは裏口をかくに——何をしてる。

三浦 確認してる。

倉田 何を。

三浦 誰が、どこにいて、何を見て、何を言ったか。

岡野 やめて。

倉田 三浦。

三浦 記録するんだろ。昨日、集合時間は午後四時二十分。場所は東口

裏の倉庫前。寺田、北村、岡野、三浦が先行。関谷と倉田は別経

路。直子はここに残っていた。

倉田 やめろ。

三浦 行動開始は五時十二分。五時二十二分には警察が動いていた。早

すぎた。早すぎるには理由があった。

岡野 三浦！

三浦 理由は、彼女だ。彼女が警察に言ってたんだ。

沈黙。

倉田 ……何だって。

岡野 違う。

三浦 違う。

倉田 岡野。

岡野 ……。

倉田 何を言った。

岡野 ……。

倉田 岡野。何を言ったんだ！

岡野 ……全部よ。時間も場所も何もかもね。

倉田 ふざけるな！

沈黙。

倉田 俺は、正しくやろうとした。順番を決めて、話を聞いて、疑いを減らして、危ないものを外して。そうすれば、少なくとも誰かは助かると思っていた……。

間。

倉田 でも、正しく並べてる間に、全部こぼれてしまった……俺は、正しい順番で間違え続けた。

三浦 倉田さん。もうやめましょう。もうこんなところにはいられない。

倉田 ……。

黒電話が鳴る。

関谷が舞台奥から現れる。手に財布と小銭を一枚持っている。

関谷 出ないのか。

三浦 関谷。

関谷 鳴ってるぞ。

倉田 どこにいた。

関谷 ここにいた。

関谷、受話器を取るがすぐに戻す。

岡野 直子さんは。

関谷 ……。

三浦 直子……そうだ、直子は。

関谷 小さい音だった。

三浦 何？

関谷、小銭を床に投げつける。

関谷 床に落ちた時、驚くほど小さい音がした。

三浦 それ……直子の財布。

関谷 三浦。お前は戻ってきたんだな。

三浦 直子に何をした！どこだって聞いてるんだ！

関谷 ここにいるさ。静かに眠ってるよ。少し疲れたんだろうな。

沈黙。

倉田 お前……まさか。

岡野 誠……嘘でしょ。

三浦 だけ。

倉田 三浦、待て。

三浦 どけ！

三浦、倉田を払いのけ、緞帳の影へ向かう。

沈黙。

三浦 ……直子。

三浦、何度も片瀬の名を口にする。

三浦が戻ってくる。椅子に座ろうとして崩れ落ちてしまふ。

三浦 聞いてないんだよ。あいつ、そういうところだけ適当なんだ。駅を二つ越えたところって。ホームの端って。どっち側だよ。上りか、下りか。俺がいつも聞きそびれるって、知ってるくせに。直子。なあ。俺、戻ってきた。戻ってくるなって言われたのに、戻ってきた。

外から拡声器の声。

三浦 俺が殺したのか。俺が言えなかったからか。俺が逃げられなかったからか。

関谷 そうかもな。

三浦 お前だ。

関谷 ……。

三浦 お前が殺した。

関谷 俺は、止めようとした。

三浦 何をだよ。

関谷 彼女は、お前を逃がした。自分は残った。そういう女だった。

三浦 違う。

関谷 違わない。優しさは、時々、裏切りより残酷だ。彼女は、お前をこちらから奪おうとした。俺たちから。

三浦 俺は、お前のものじゃない。

関谷 いいや、仲間だよ。

岡野 関谷、もうやめて。

関谷 玲子……お前もだ、俺は知ってた。お前も、怖くなって外に売ってたこと。止めるため？違う。自分が怖かったただけだろ。

岡野 そうよ。怖かった。怖かったから三浦を疑った。怖かったから、自分が言ったことを誰かの顔にした。あんたみたいに、革命の言葉で飾ったりなんかしない。

倉田 岡野。

岡野 でも、あんたは違う。あんたは、怖かったことを最後まで認めない。だから人を殺しても、守ったと言いつづけるのよ。

関谷 黙れ。

三浦 直子を殺して。何を戻すんだよ！

岡野が膝をつく。

岡野 もう、終わりよ。私たち。終わってたのよ。ずっと前から。

関谷 終わらせるわけないだろ。

倉田は机に手をつく。

倉田 落ち着け。今はとにかく全員で外に出るぞ。武器はないが、裏口がある。急いで――。

関谷 武器はある。

倉田 何？

三浦 ……。

関谷、机に向かおうとするが、三浦が先に机の下へ手を伸ばす。古い布に包まれた拳銃を取り出す。

倉田 三浦！置け！

岡野 やめて！

関谷 三浦。お前……覚えていたのか。

三浦 忘れてたまるか。

関谷 俺を撃つのか。

三浦 どうか。

関谷 お前に俺は撃てない。

三浦 勝手に決めつけるな。

関谷 お前は、見る男だ。

三浦 やめろ。

関谷 撃つ男なんかじゃない。

三浦 やめろ。

関谷 俺はお前を信じている。三浦。

三浦 気安く呼ぶな。

関谷 お前はまだ戻れる。

三浦 もう戻れないんだよ！直子は戻ってこない。寺田も北村も戻ってこないんだ。

倉田 やめろ！三浦！

三浦 倉田さん……あんたは玲子さんを連れて逃げてください。まだ間に合う。

倉田 ふざけるな、置いてはいけない。

三浦 いいから行ってください……もうこれしかないですよ。時間がない。あんたはいつだって正しい男のはずだ。今回は正しく生きてくださいよ。お願いします。最後に正しいって言えるのはあんたしかないんだよ。

倉田 ……。

三浦 早く！

間。

倉田 分かった。

倉田、崩れ落ちてる玲子を連れて歩き出す。

倉田 ……関谷、お前は間違えた。……俺たちはもう、お前の革命にはいない。

倉田、岡野を連れて去る。三浦と関谷だけが残る。

三浦 革命家ってのは便利だよな。

関谷 何。

三浦 腹が減れば人民と言える。怖くなれば規律と言える。迷えば歴史と言える。殺せば必要だったと言える。

関谷 ……。

三浦 マルクスも、レーニンも、トロツキーも。みんな、お前の口からは同じ声になる。進め。止まるな。ダントンは喋ったんだろ。首を落とされる直前まで。自分が何者だったのか。何を信じたか……でも、直子は……もう喋れない。お前が黙らせたからな。あの時から俺は、彼女の声を聞けばよかったんだとずっと思う。

外から拡声器の音。警官隊の影が入ってくる。三浦たちを囲う。

関谷 撃てよ。終わらしてくれよ。なあ三浦。

三浦 呼ぶな。

関谷 撃て。

三浦 やめろ。

関谷 撃て。

三浦 やめろ！

関谷 撃て！

発砲音だけが響き渡る。

〈終幕〉